講演録

土手の花見（上）

～防災と市民力～

立木茂雄
同志社大学社会学部教授

今年は、**阪神淡路大震災**から17年目、**能登半島地震**から４年目に当たります。近年の貴重な被災体験からしっかりと教訓を学びとらなければならないとの思いから、今号・次号の２回にわたり講演録（要旨）を掲載します。

本講演録は、平成22年11月17日に区内の地域福祉活動を担う関係者231人の参加のもと開催された「平成22年下京区社会福祉大会」において、立木茂雄教授にご講演いただいた内容を要約したものです。福祉の立場から「防災」を考える、大変わかりやすいお話でしたので、広く区民の皆さんにご紹介させていただくことにしました。今後のご近所付き合いや地域活動を進めるうえでの参考となれば幸いです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

正しい「災害」のイメージを持とう

＊サイレン音がしない、火災現場

阪神淡路大震災の時、1995年（平成７年）１月17日午前５時46分、15～20秒くらいの瞬時の揺れで多くの住宅が倒壊し、約4，500人の方が、圧死や窒息死されました。直後は、倒壊家屋の隙間から救われた方もあったのですが、やがて火災が発生し、約400名の方が焼死されています。あの時、神戸市では長田区一帯を中心に、火災が60件発生しました。

通常の火災だと、住宅が燃えると消防車が出動し、消火にあたります。これは緊急の事態ではありますが、「災害」事態ではありません。

しかし震災のこの時は、火の手がたくさん同時にあがりました。消防車は一斉に出動しているのですが、数には限りがあります。すると家がメラメラと燃えていながら、そこに「消防」がいない状況が出現します。全くサイレンの音が聞こえない、大変静かで異様な火災現場、これが「災害」なのです。

神戸市長田区（1995年1月17日）

＊実は身近にある「減災器具」

16年後の今日、もし、例えば下京区の街で、同じような地震が起こったときにはどうでしょうか。16年前の出来事を教訓に、準備できることはないでしょうか。

重い梁が覆い被さってくる、手では持ち上げられない。重いものを持ち上げる道具で、どこにでもある物を考えると、自動車に積んである「油圧式ジャッキ」を活用することも一つのアイデアです。

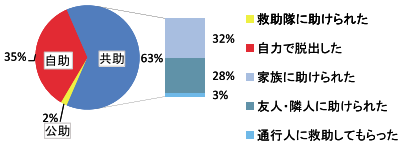
＊地震災害から火災を防ぐ取り組み

神戸で、なぜ火災が起こったのかを考えますと、発災時、すでに朝ご飯の支度をなさっていた住宅があったということがわかっていますが、もう一つの原因は電気ストーブです。揺れた直後は停電しますが、少し時間がたって再び通電すると、下敷きになった電気ストーブに電気が入って、覆い被さっていたものに火がついてしまいました。

揺れがひと段落して、屋外に避難する時にぜひやっていただきたいこと、それは、電気のブレーカーを落としていただくことです。このことで神戸のような「通電火災」は未然に防ぐことができます。

事実、３年前に能登半島の輪島、とりわけ旧門前地域で地震が発生しましたが、その時には地域の皆さんが、避難する時にブレーカーを落として行かれています。率先されたのは、地域の自治会役員や民生児童委員の方々でした。そうやって、声を掛け合ってブレーカーを落としていくことで、町を火災から防げるのです。

＊生き埋め・閉じ込められた人は「誰」に救助されたのか？



出典：日本火災学会（1996）
阪神・淡路大震災の火災地域を対象に、235名に調査

この阪神淡路大震災の時、生き埋めになられた方々が、火災で全員亡くなられたのかというと、決してそうではなく、助かった方々もおられます。どんな風にして閉じ込められ方々が助かったのかということを、後になってから尋ねますと、結論は、自力で脱出した方、「自助」が３分の１、家族や近所・通りがかりの人に助けられた方、「共助」が３分の２です。警察、消防、自衛隊というような「公助」で助けられた方々はわずか２％です。

＊長期化する被災生活の中での「関連死」

阪神淡路の震災では、若い人も、お年寄りの方も、壮年の方も、皆さん等しく住宅が倒壊しています。下敷きになられて、その後の火事で多くの方が亡くなっていますが、地震直後はちゃんと命が救われたけれども、その後の避難所生活、不自由な生活の中でお亡くなりになられた方々も、900人以上にのぼりました。

それらの方々はどういう理由で亡くなられたのかというと、肺炎、心臓血管障害、脳溢血、脳梗塞などで、圧倒的にご高齢の方々が多数でした。直後には大丈夫だったけれども避難所の生活が合わない。高齢で持病がある方に見合ったような支援、避難所生活の支援というのが十分に行われなかったために、「関連死」で多くの命が奪われてしまっています。「関連死」も実は災害の一部なのです。

災害への備えの基本

＊災害とは「ハザード（災害誘因）」と「ぜい弱性（被災素因）」が重なりあって生じる

地面が揺れる、あるいは浸水する、こうした災害の引き金になる誘因を、危険という意味の「ハザード」と言います。その危険なものが社会の中の脆弱なところを襲うことによって被害が生まれるのです。

だから普段から、私が住んでいる所、あるいは気になる方が住んでおられる所ではどんな被害が出ることがそもそも想定されているのか、そういう地理的な知識と、お一人お一人の方がどういった所にお住まいなのかという知識、この２つを合わせて持っていないと防災につながらない。言い換えると「防災」とは、まさに人間の力に頼ることによって被害を抑えることができるのだということなのです。

＊わが街、京都市下京区の「ハザード」を知る

「ハザード」、どんな危険が、この京都の町では想定されているのでしょうか。

「花折断層」というのが市内の吉田山西側、京都大学東側あたりを南北に走っています。「花折断層」が動くと、下京の一帯は、大変な揺れに見舞われることがもう事前に想定されています。一部地域で震度７、それ以外は震度６強の想定です。

下京区地震災害ハザードマップ

下京区水災害ハザードマップ

こういうハザードの情報は**「京都市防災マップ～地震編・下京区版～」**あるいは**「同マップ～水災害編・下京区版～」**とい名称のマップで、すでに市内、各世帯に配布されています。もしお手元にない場合でも、京都市のホームページで、「防災マップ」と検索することで入手が可能です（**http://www.city.kyoto.lg.jp/shobo/page/0000015347.html**）。

水災害の場合でも、ご自身が住んでいる所は何メートルぐらいまで水が来るのか、あらかじめ知っておくことが大事です。街中の内水氾濫であれば、下手に避難するより２階にお逃げになられる方が安全です。そのようなことを事前に考えていくための手段としてハザード情報が京都の場合、地震と洪水の二通りの想定がされているのです。

地域の中で配慮が必要な方々の支援を考える時も、その方の身体的な状況とか置かれた状況もさることながら、まず何よりもどこが危険なのかということを知っておくことが必要なのです。危険な所にお住まいで、かつ誰かの助けを必要とされる方の支援を、まずは優先して考えることが大切になってきます。

（次号に続く）

立木　茂雄（たつき　しげお）
○同志社大学教授／人と防災未来センター上級研究員
○社会学の立場から，自身も西宮市で阪神淡路大震災を被災した経験も踏まえ、大災害からの長期的な生活復興過程の解明や、災害時要援護者支援のあり方などを研究
○編著書として『ボランティアと市民社会（増補版）』（晃洋書房01年）、『市民による防災まちづくり』（NHK 出版）、『阪神大震災の社会学』（昭和堂）など

であいふれあい町衆のまち
いきいき下京
下京区役所ホームページ http://www.city.kyoto.lg.jp/shimogyo/

市政情報総合案内コールセンター
京都いつでもコール
午前８時～午後９時
市への問い合わせに年中無休でお答えします。
電話 661-3755　FAX 661-5855
電子メール　パソコン http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000012821.html
携帯電話 http://www.city.kyoto.jp/koho/m/cc/